

心に宿る軽便

ほんの十数年しか走らなかった軽便。利用者や運行に携わった人たちにとって、軽便はどんな存在で、どんな思い出を残してくれたのか。



新野川橋梁を渡る

「何もない時代でした」。しみじみと当時を振り返る澤瀬勝雄さん。戦後、間もない昭和22年、静岡鉄道(株)に入社し、その後、駿遠線の各駅に長年勤務。軽便鉄道とともに人生を歩んだ一人です。

池新田駅に勤めた7年間は貨物係や予備助役を務め、荷物の積み降ろしから売上金の精算などの業務に携わりました。池新田駅は、現在の御前崎市役所の南側、国道150号のインターチェンジから少し東へ行った辺りにありました。

「朝晩は池新田高校に通う生徒や横須賀方面に勤める会社員の大切な足となっていました。日中は、あま



池新田駅の駅員だった澤瀬勝雄さん(本町)



◀軽便鉄道の線路の切れはし



▲実際に使用されていた笛



▲切符を切る時に使ったハサミ



▲タブレットと呼ばれる通行票

皆で押した登り坂

吉野哲夫さん(新野西)

佐栗谷トンネルの手前は緩い登り坂なので、乗客は一旦降りて車両を押し込んだんです。近所の子どもたちは、貨物車両に積まれていた芋切り干しが欲しくて、みんなで後押しを手伝ったものです。



Voice

軽便車両で遊んだ

丸尾松夫さん(早苗町)

子どもの頃は、走り出す車両から飛び降りたり、ずいぶん危険な遊びもしたものです。当時は、いたずら小僧が多かったのでしょうか。私たちにとって、軽便の車両は絶好の遊び場でした。



Voice